

St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学紀要と「看護学」の発展を祈って

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 登紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/273

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



が現在（平成5年）（1993年）では年3回の発行が可能となっています。また、昭和62年には、学会として認められることになりました。

時代的な背景を考えると、昭和60年代の前半、特に私が編集委員長をした時期は、研究者が育つための過渡期であったように思われます。

70周年の記念誌を作成する中で、高木廣文先生に教員活動一覧をお願いいたしましたが、（昭和39年から63年まで）丁度、61年頃から、教員の研究活動が急激にふえはじめた時期であることがわかりました。著書、訳書、論文、学会発表の中では特に学会発表数が目立って多くなっていました。現在は、私共が考えていました、査読制が導入され、論文数も増していることは何よりうれしいことだと思っています。

聖路加看護大学紀要と「看護学」の発展を祈って

聖路加看護大学 教授 木村 登紀子
（第15号～第18号紀要委員長）

紀要第20号の発行にあたり、私が委員長を拝命しておりました1988年4月から1992年3月当時を中心振り返ってみます。

飯田委員長のもとで、忙しくも楽しく第12号から14号の発行に携わらせていただいた後、荒井蝶子先生をはじめ合計6人のメンバーで、第15号（1989年3月刊）の発行に取り組みました。この号から、各論文に、日本語抄録と日本語および英語のキーワードを各5語付すことになりました。これは、日本科学技術情報センター（JICST）のデータ・ベースに、本学紀要の英文抄録が入力され活用されるようになったことの影響でもあります。委員会議事録によりますと、日本科学技術情報センターよりの「英文抄録の活用依頼」に対して、檜垣学部長の名前で手続きをとった旨、報告（1986年12月16日）されています。これは、「ISSN（国際標準逐次刊行物番号）の割り当て」（1983年12月8日付）と併せて、本学紀要の存在が、広く国際的な学術の世界に知られる可能性と、また、その水準が常に問われるようになったことを意味していますので、ここに謹んで記しておきます。

1988年度は、また、本学に、本学院博士後期課程の設置が認可された年でもありました。これによって、日本で初めて「看護学」が「学」として公的に認められたことになり、記念すべき重要な年でもありました。こうした背景の中で、博士後期過程の完成年次である1991年3月（第17号）の「編集後記」には、「完成年度までのこの3年間、紀要委員会でも、折々に研究と教育の殿堂に名実ともにふさわしい「聖路加看護大学紀要」にしていきたいものと、いろいろ夢を語り合って参りました。今後とも一層、皆様のめざましい学問上の成果の発表の場として、「紀要」をご活用いただけますと幸いです。」と記述されています。

当時の委員会議事録より討議事項の概要を拾いますと、毎年のように「紀要の性格」について論議されており、それとの絡みで教員業績一覧の掲載の意味とその分類の仕方、卒論や修論の題名や公開講座一覧の掲載の是非について話題になっておりました。なお、英文抄録の英文のネイティブ・チェックについては、検

討の結果、執筆事項には入れずに内規として投稿者に渡すことに決めたとされています。そして、1992年3月31日付の「1991年度活動報告」には、「紀要発行について」の次のような申し合わせ事項が記されています。

①紀要は年1回発行している。

②紀要の構成（アニュアルレポートの性格をもっている）

- ・ 投稿原稿 5編以上（背表紙を付けるため）を載せる
- ・ 教員業績（学内専任教員、病院兼任教授のみ）
- ・ 公開講座一覧A, B
- ・ 博士論文、修論、卒論などの各題目一覧
- ・ 紀要規則
- ・ 執筆者紹介
- ・ 編集後記
- ・ 奥付け

③外刷：現在は500部

その他、④配付先、⑤正誤表、⑥別刷りについて記録されていますが詳細およびそれ以外の事項については省略します。また「原稿に関する手順」については、①投稿の呼びかけは6月はじめ頃、②原稿締切期限は9月末頃、③受理会議は原稿が集まり次第行う（まとめて行うことはなかなか出来ない。現在は査読システムがないため、出された原稿は自動的に受理される。）などのことが記載されています。そして、「原稿が純粋な研究報告だけではない、この紀要をどう考えるかはっきりしていない？」という記録や、第13号から18号の編集後記には、先に述べた17号を除くすべての号に、「年度内発刊にこぎつけることが出来御協力に感謝致します」といった言葉が見られることから、当時の原稿の集まり具合について御推察いただけることと思います。御多忙の中、看護の教員はもとより一般教育の教員にも御無理をお願いしたり、大学院特任教授の方々に順番に原稿をいただいたりして、毎号何とか6編から8編の論文（および報告）を得ることが出来ました。こうした事情の中で、日野原先生が毎号必ず御投稿下さいましたことを、ここに記して感謝申し上げます。

当時、紀要発行に携わりました委員は、毎年6名でした。構成メンバーは、学長よりの任命で、大学全体の役割分担の都合によって、2年ないしは1年で入れ替わっておりました。例外的に、及川郁子先生は1988年より1993年までの5年間を継続して委員会の中核的存在として活躍して下さいました。今日、査読の制度を導入され、しかも今年度は4名の委員で、紀要発行に纏わるすべての業務をこなしておられます御様子に、ただただ敬服し感謝致しますとともに、併せて、教員の研究発表の場としてますます高い水準の学問的業績が寄せられ、本学紀要も看護学も（その他の関連領域も含めて）一層の充実と発展が遂げられますように、心よりお祈り申し上げます。

聖路加看護大学紀要第20号正誤表

ページ	行	誤	正
21	7	included <u>J</u> apanese	included <u>J</u> apanese
	9	Social <u>S</u> tudies	Social <u>S</u> tudies
	10	achieve <u>m</u> ent	achievement
42	表3	看護婦の__	看護婦のみ
56	引用文献 3)	第 <u>10</u> 回	第 <u>11</u> 回
	引用文献 4)	第 <u>10</u> 回	第 <u>12</u> 回
	引用文献 5)	第 <u>10</u> 回	第 <u>13</u> 回
65	23	<u>いろ</u> の問題	<u>いろいろ</u> の問題
69	下から8	看護 <u>学</u>	看護学
	下から9	博士後期 <u>過</u> 程	博士後期課程
72	下から7	人口呼吸器	人工呼吸器
80	23	発行所・発行機関 記述なし	医学書院
83	最下行	操 革子	操 華子
85	下から9	学会名 <u>Narsng</u> Conference	<u>Nursing</u> Conference